

◇佐藤 昌子 (89歳)

## この世の生き地獄

空襲・被災 ●

私は、昭和二十年四月十四日夜より麻布永坂町内で、疎開で空き家になった家に移っていました。その前に我が家は、昭和二十年三月三十一日強制疎開させられ、夫亡き後五人の子（長男は十九歳で繰り上げ召集にて中支＝中国）をかかえて永坂町会事務員として働いていました。空襲警報、続いて敵機米襲のサイレンは鳥居坂警察署（現在の保護所の隣り）穴水邸の詰所に飛び込み右往左往するのみ、下の子二人を早く早くと麻布三連隊方面へ逃がし自分のわずかの通帳と大事な品（これは三月九日夜の下町、浅草の空襲で実家の一家四人行方不明。かろうじて焼け跡に焼けたながらも金庫より出した貴重な品を、ただひとり山梨の姉宅に、疎開している四歳の姪に渡す為の品）をかかえ、防空壕へ飛び入りしました。

爆音のすさまじさ、何機か知れず、ようやく隙を見て、出てみれば、警察の屋上には、人かげもなく、また一機、雨あられのごとく、焼夷弾が降りしきっていました。夜明けとともに、壕より出てみれば、坂上の一部を残し、一面の焼け野原。焼け残った町会長宅（鈴木さん）で、罹災証明書の発行、炊き出しのおにぎり、かんづめは麻布小学校より。それもつかのま、五月二十四日の再空襲に、町内ほとんど全滅。焼け跡の防空壕生活となり、区役所より配給、物資伝達、やがて、飯倉片町、仲ノ町と、罹災をまぬがれた町会と合併されました。物資はますますなくなりお米の配給もなく、大根半分、小麦粉のかわりに豆カス。二度の罹災に物資交換するものもなく、買出しは、もっぱら末っ子の小学校を出たばかりの息子の役目でした。

終戦後、二十二年六月、マッカーサー指令により町会解散。出張所はやがて三十三年、区の方針により廃止。麻布支所の戸籍へ晴れて区の職員となり、昭和五十年退職しました。夫亡き後よく生き抜いたと思うこのころです。健康に恵まれ近くの本村福祉会館にて、歌に、踊りに、ダンスに明けくれる毎日にて幸福です。

三月十日の事を思いおこすと、永坂町内へ罹災証明書を持って転入してくる人より実家の浅草あたりは、本所、深川は

もちろん、向島、上野山より見れば、日本橋、神田一面焼け野原とのことに、兄一家は、音沙汰なし不安の日、一日二日となり、三日目に、焼け跡にたどりつけば、金庫が焼けただれてあるけれど、あちこち立ちのき先の立札が見えるのに、実家の札はない。すぐ、山梨へ電報のやりとり、しかし一向に様子がわからず、いよいよ不安となり、親戚の者と蔵前警察署を訪ねたところ罹災者は同愛病院とのこと。名簿にないと聞かされても、もしやと病室のドアを開けたとたん、目、鼻、口だけをのぞき、手足ともほうたいの火傷者が、一斉に当方を見る。そのおそろしい様、この世の生き地獄とはこれかと思われました。病院をあとに墨田川を見れば、これはまた驚くばかり。死体が数しれず浮いたままでした。また、兵隊の焼死体を運ぶのに出合い、この地域は後片付けは終りと言うなりトラックに飛び乗るや、死体を持ち上げて、腰をおろしたかと思うと、また死体をひぎの上に。合掌とともに去りゆく様に、兄一家も、この中にと思い手を合わせ涙なく、日本橋、芝、麻布とたどりついたのです。たまたま山梨へ疎開していた姪の養育について、親族会議、後見人設定。

我が三男、四男のほかにも疎開者を抱える姉。四歳だった遺児も今は二児の母となり幸福。九十四歳の姉も自分の子七人に加えての養育。想像以上のものでした。今は毎年三月十日の都主催の慰霊祭。墨田区の記念堂にお参りをして当時をしのび冥福を祈るのみです。



## ◇渋谷 益夫（73歳） 東京空襲と焼夷弾

空襲・被災 ●

昭和十六年七月は、毎日のように港区の各方面に、召集令が配達された。私も七月十日、千葉県柏市にある、高射砲二連隊に召集された。それだけ日本が東京空襲を予測して、軍備を計ったのだと思う。柏の連隊から即日夜間、軍服に着替えると、トラック五台に分乗して、習志野原陸軍宿舍へ入った。それから毎日のように、召集兵が数多く入隊して来た。

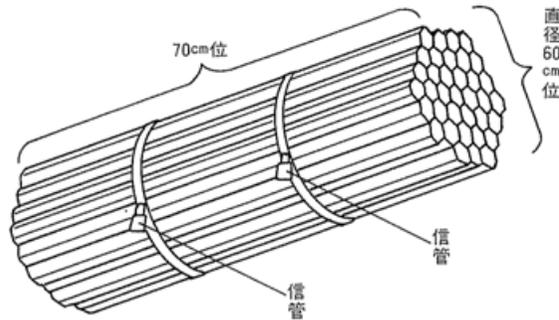
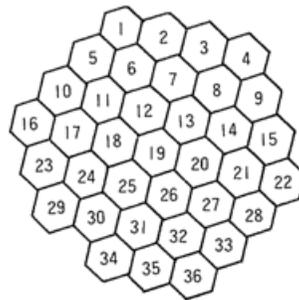
昭和十八年四月十八日、正午頃に一回、初めて本土空襲があった。私が埼玉県川口市の芝川にいた時だ。高射砲六門を据え川口市の軍需工場と東京防空が目的で配備されていたのだが、米国のノースアメリカンB24という灰色の海軍の艦載機で、双発方向舵二枚で、ちょっと珍らしい型の飛行機だった。それが、たった一機でそれも真昼間、日本の上空に来たのだった。軍部は虚を突かれて、空襲警報発令が遅れ、発令された時は、すでに王子を爆撃され、川口市上空を操縦士の顔が見える位の低空で飛び去って行った。高度五十メートルぐらいだった。その後東京空襲は無かった。

そして昭和二十年三月九日午後十時十分頃、突然空襲警報が発令された。私は月一回の外泊で、新橋の家<sup>に</sup>いた。早速私服から軍服に着替えて外に出た。風の強い夜だった。その時はもう浅草方面の空は真赤に燃えていた。家を出て、すぐ近くにあった小寺ビルの屋上に上った。その時代は今と違って鉄骨のビル等は珍らしく、四階建の屋上からは、浅草の街の燃え盛るのが手に取るように眺められた。現在種々の本を読むと、北風二十メートルから三十メートルと記されているが、私は南西の風だったと思う。それでも新橋方面は真暗で、飛行機の爆音すら聞こえなかった。本所、深川方面だけが真赤な空だった。それが突然、東京湾芝浦汐留方面からB29一機が飛来して、低空で高度百メートル位に見えた。民家の屋根すれすれ位に見たB29が市電の軌道の上<sup>に</sup>カラカラランと鉄パイプが落ちる音がした。小寺ビルの屋上から下を見ると、軌道上に火の付いた、コンニャクのようなどろどろの塊<sup>かたまり</sup>が点々と飛行機の飛び去る方向に木造家屋の屋根の上<sup>に</sup>飛び散っていた。

私は急いで三、四軒離れた我が家に帰って見ると、もう家の屋根は抜かれ、はめ板が燃えて、それが一ヶ所でなく、点々と附着して燃えていた。道路上に落ちた泥々の塊りを靴で踏み消そうとしたら、靴の横に、はみ出して消えず靴の両脇にどろどろが附着して、今度は自分の靴が燃え始める始末だった。一度火の付いたコンニャクの塊は消えずに、二ツにも三ツにも増えるのである。これが油脂しょういだん焼夷弾である。

一本の焼夷弾は、六角形をしている。直径八センチメートル位、長さ七センチメートル位の筒型で三十六本を円状に一括、直径六十センチメートル位を一束にして、途中二ヶ所を、鉄線で縛りそれに信管が付いていて、飛行機から落ちて、何秒後に、鉄線が切れて、ばらばらになって落ちる仕掛けになっていた。米機B29の高度は、二、三百メートル位で、新橋の我が家の上空を低空で、東京湾の海岸から汐留、浜離宮方向から進入して、愛宕山方面へ飛び去り、それが最後の一機だった。我が家が焼けている時は、空襲警報解除だった。ちょうどこの時、芝消防署の大型のポンプ車が一台、現在の大信本店の横道路に止り、燃えている家屋には、放水せず、反対側の家屋に放水をして、延焼を防ぐのに、精一杯だった。そのために、現在の東新橋二丁目と、新橋六丁目は火災の発生を免れたのである。その後しばらく空襲は無かったが、五月二十四日夜、新橋方面に再度の空襲で、浜松町、金杉、三田方面が焼跡と化したのである。

焼夷弾が36本一束の図



◇鈴木八重子（61歳）

## 忘れ得ぬ三月十日の御成門

空襲・被災 ●

港区が平和都市宣言をして五年経つ。終戦後、荒廃からの立ち上りは、驚くべき速度で、世界の瞳目を集めるほど高度成長をした日本。

あれから四十五年といっても、私の心の画布は銀色のB29の編隊と、爆音の無気味さが、今も鮮烈に描かれたままである。

当時、女学校三年、十五歳だった私は「家だけは焼けるはずがない」と信じていた。

毎夜、日本上空へ爆撃機が来襲し、ウォオウオオとサイレンが鳴るたびに、防空頭巾、モンペ仕度で寝床にいたあのころは「きょう〇〇方面から敵機〇〇編隊で侵入」というのが、ラジオの主なニュースになっていた。

私が小学校六年の十二月「真珠湾攻撃」でスタートを切った日本の戦勝の情報も束の間、強制疎開の声が巷にきこえる頃も、「二億一心」「欲しがりません勝つまでは」と、第二次世界大戦の波が、一国を覆っていった。

昭和二十年三月九日、戦時色一色に統一されて着用禁止と

なった冠婚葬祭用衣服や、タンス、掛軸の類をトラックに満載して、父は御成門から、疎開地埼玉県赤沼（現春日部市赤沼）へ向った。

三人の兄たちも、常時十人はいた従業員たちも、全部兵隊にとられて、初老の父一人が、埼玉へ行った夜、御成門の一角三軒目にあつたわが家は、焼夷弾で火災の中へ消えていった。

「空襲警報」のサイレンが「敵機来襲」の爆音に変わった途端、早くも、ウーインバリバリと、私の胸の上を、低空飛行で飛んだように感じた。ガバツと飛び起きた私は二階から素早く階下におりた。時計は午前一時を回ったところだ。

一階は女ばかり、母を始めとして姉たち、私は末っ子の四女である。灯火官制下で、真っ暗の中、隣家に直撃した火煙りが、パーとこちらに燃え移ってくるのが見える。

戦争の苛烈さは国民から金・銀を拠出させ、金歯まで国に供出していた母のお召類は姉妹のモンペに縫い直され、全員着用していたので、行動は早かった。しかし、頼りになる男

性の全くない無防備の家庭に、戦闘機による爆撃は戦争の恐怖も、無残さをも、ふり返る間もなく、とび散る火花を飛び越えて、自宅前の三角公園防空壕へ逃げ込むのが精一杯だった。トコトン焼けるとばかり低空飛行が繰返されて、わが家の前に並べるように焼夷弾が落ちた時、夜空をバックに火焰に包まれた花崗岩洋風造りのわが家が、轟音をたてて焼け落ち、グワツとくずれる凄じい光景を、姉と固唾をのんで見守るばかりだった。家の前にある消防署も、警察署も暗黙としており、毎日の防空訓練は一粒も役立たず、不思議なことに入つ子一人見えない中を、御成門の十字路は竜巻が火柱をあげ、自転車も倒れ、たくさん紙片が火炎混じりで飛び散り舞い上った。

火の海の中、みんなどこかへ逃げきったのか、隣家の犬小舎から、つながれた犬の鳴き声が、いつまでも悲しげに響き渡った。

猛火に呆然と佇む私をファイに「早く」と促されて、私の見知らぬ十八歳ぐらいの青年が小型車で助けに来てくれた。突風と、火の粉にあおられながらたどり着いた車には、髪の毛がチリチリ焼けになっている姉が、大きな御飯櫃を「火の下くぐって取り出して来たのよ」とかかえていた。命からがら助けられた姉妹が、ホッと手を取り合っただのは大門（現昭和電工本社）の前であった。

嘘のようにここは静寂な真夜中、数百メートルの差で火の気配もない。もう三月十日なのだ。その夜はすぐ近くの神明

にある親戚で一夜を明かし、翌朝早々に姉たちと、かけ出せば真近な御成門へ行ってみた。

焼け跡にはまだ白い煙りが出ており、日比谷方向まで焼野原の中、当家の金庫だけが残っていた。防空壕から戻った母も驚いて金庫屋を呼び、開けた瞬間、白い蒸気が吹き上げ、グオーッと中に火がついてしまった。すべてを失ったかに見えた私たち一家は、全員貴重な命だけは失わずに、父の知人である芝公園の新聞社社長宅に避難した。同じそのころ、浅草にいた私の親友の父上が焼死され、江東区方面の悲惨さは、隅田川に死体が溢れ、立ったまま真っ黒焦げになっている人の群れで埋まっている情報がすぐ伝って来た。余りのむごさに慄然としていた間に、再度五月二十五日の東京大空襲で被災し、初めて一家は疎開先の埼玉へと再避難し、家族の黄金時代を築いた私の御成門が戦争のために幻のように消え去ってしまったのだ。

軍国主義を恐ろしいとも思わず、一人一人が無我夢中で挙国一致の国家命令にただ従うのが当り前のようだった時代。小さい子が学童疎開をして耐乏生活を強いられていた不幸。ズボンをはいても非国民呼ばわりされて、抵抗とか、自由な発言には憲兵の目が光って、ら致されるほど苛酷な戦争が、遂に八月六日、九日のヒロシマ・長崎の原爆投下まで日本国民をひっぱっていったことを私は忘れない。

# ◆立木 一郎（58歳） 炎に追われて

空襲・被災 ●

毎年、三月十日近くになると恐ろしかった東京大空襲で、炎に追われて逃げ歩いた夜を忘れようとしても、忘れる事が出来ません。

昭和二十年三月十日未明、アメリカの超重爆撃機B29が約三百機、私たちの街の上空に飛来し、焼夷弾を雨のように落して行きました。

すぐ近くの家のあちからから、こちらから火を吹き出しました。母は、私の背中に一番下の妹を背負わせ、その上の妹の手をつながせました。弟は書類などの入ったリュックサックを背負わされ、「子どもたちは、先に明治座へ行きなさい」と言っただけで母は、家に残りました。私たちは、近所の人たちと一緒に明治座へ向いました。明治座の中は町内の人たちで一杯でした。牛乳屋のおじさんはトイレにいました。「シヤッターを閉めるぞー」と何回か大声で叫ぶ声が聞えました。私は「父ちゃん、母ちゃんが来ないから、外へ出る」と弟・妹たちと人々をかきわけて、火の粉が降って来る通りへ出ました。その時、二人の姉に会うことが出来ました。それ

からは、炎に追われ、熱風と煙、火の粉が風で舞う中を避難する人たちの波に続いて歩いていくうちに、弟の防空頭巾に火の粉がついて燃え出しました。「頭巾がだめだー」と弟はそれを捨てました。どのくらい歩いたでしょうか。夜がしらじらと明けて来ました。

上の姉が「戻ろう」と言いました。振り向くと歩いて来た所の家は皆焼けてしまっただけで、黒々とした平面がずーと遠くまで続いています。私たちは、家のあった日本橋浜町二丁目へ戻って行きました。途中で父と母に会えました。明治座の建物は黒くなつて煙を出していました。母が「ごはんが炊けていた」とお釜を持って来ました。お米を洗って水を入れて置いたのだそうですが、熱風でごはんになっていました。蓋は木製でしたから焼けてありません。防空壕の中に入れた、ふとんも熱風で焼けました。着ていたものの他は、全部失いました。家族全員、無事であった事が何よりでした。

昼すぎ頃になって、焼け残った水天宮近くの有馬小学校へ行きました。そこで炊き出しのおにぎりを食べ、講堂で大勢

の人たちと一緒に眠りました。「明治座に避難した人たちは全員死んだよ」と大人たちは話をしていました。

何日か後、お爺さんと叔父さんのいる田村町から近い虎の門に住む事になりました。

けれど、まだまだB29が東京の上空へ来て、焼夷弾を落しては去って行きました。父はO製薬へ勤務していて、知人の紹介で蒲田の千鳥町へ私たちは移りました。

五月二十五日夜の空襲でひと抱え程の焼夷弾が、屋根を突きぬけて落ち、炎が家中に広がって火の海のようになり私たちは又、家を失いました。駅も焼けて、電車も走りません。その日は、父の会社の倉庫がある神田を目指して、両親と兄弟たちとはぐれないように夢中で、五・六時間ほど歩き続けました。

倉庫の二階で他の二世帯の人たちと、共に暮らすようになります。父は会社、姉たちは学徒動員で工場へ、私は学校で教練の授業の毎日、弟は小学校へ通いました。朝から暑かった八月十五日、天皇陛下下のラジオ放送で終戦になりました。

もう、空襲で夜中に避難する事もなく、炎に追われる事もなくなりました。けれど、何と恐しい、悲しい出来事を体験したのでしょう。私は十三歳の誕生日を過ぎたばかりでした。

戦争中、戦後も食料品と着るものは配給で充分ではありません。一週間分の野菜の配給は、八人家族で十五センチ程の人参が一本でした。洋服もタオルも糸も点数キップ制でした。

が、商店に品物がありませんでした。昭和二十五年の終り頃まで布製品と糸は、キップがなければ買えませんでした。食堂へ行っても、ごはんものは昭和二十九年まで外食券がなければ食べられなかったのです。デパートの食料品売場で、海藻を原料にした黒いめんを売っていました。配給された小麦粉と交換でパンを買うために行列に並んだのは、昭和二十四年。

街の商店に商品があふれて、いつでも欲しい物が手に入る現在では、思い及ばない事でしょう。必要な物を買う事が出来なかった戦争中は苦しくて、悲しくお腹がすいていた毎日でした。

今年、平成二年三月二日金曜日のY新聞に浜町小学校の同窓会を戦後、始めて四月八日に開催するという記事を妻が見付けました。浜町小学校は昭和二十年三月十日に焼失し、廃校となって現在は、浜町会館になっているそうです。わんぱく仲間だった人たちが何人に会えるのでしょうか。

戦争は、多くの人の命を奪います。人々の暮らしを変えて終わります。今も地球上で戦争があるのです。戦場になってしまった、地域の人たちは苦しんでいるのです。私たちは、この事を深く考え行動して行かなくてはなりません。

◆津田 成一（63歳）

## 紅蓮の炎から逃げて

—三月十日の大空襲—

空襲・被災 ●

三月十日の朝の光が防空壕の口にさしこんできた。薄暗い壕の中に家族の青黒い顔が並んでいる。「成一、君枝、聚三、お父さん。いるね、みんな。ああ、よかった。生きたね。」と母のかすれた声がしじまを破った。その言葉で五人の家族の心がゆるみ、それぞれは姿勢を崩し、焼けこげのデカデカユックによりかかり眼を閉じようとしたが眠れない。目玉だけがきらきら光る。そしてまた沈黙が続いた。そして昨夜、業火の中を逃げ惑ってきたことをもう一度はつきり思い出していた。自分の生を明らかにみつめるために。

明治のご維新の頃から本所、東両国に住んでいたわが家はB29の焼夷弾が落ちてきたのは、三月九日の夜の十一時頃であった。まるで太い夕立のような音を立てて落ちてきた。

父、母、私（師範生・十八歳）・妹（師範生十六歳）・弟（小学一年生）のわが家族は、待避していた防空壕からすぐに飛び出し消火に当たった。私と父は二階に上がった。もう三ヶ所から炎が出ていた。防空訓練通り、濡れむしろ、砂、水をかけ、火叩きで要領よく消火したが、階下に来てみるともう

手遅れであった。火はふすま、障子に燃え広がっていた。「おい、もうだめだ。外へ出ろ。」という父の叫びで五人は大通りに出た。すでに近所のどの家からも火を噴いている。人影はない。「おい成一、風上はどっちだ。」父が怒鳴った。指先をなめて感覚的に判断した私は、「方向は北。両国駅方面が火の手やすい。」と軍隊式に答えた。

轟々となる火の音。冬の北風に火の風さえまじって立ち歩きもままならぬ強風。トタン板や木片が飛んでくる。背をかかめるように五人は声をかけつつ道を風上に向かった。

道路の両側の家並は、われらを呑みつくさんばかりに火を噴いている。熱い。妹や弟のリユックに火がついたのを叩いて消してやる。そのそばから顔に火の粉がついてくる。母校の江東小学校は、焚き火の石油缶のように窓という窓から黒煙と紅蓮の炎を吐き出している。昼間のように明るくなつた街を五百メートルをようやく一時間も逃げまどいながら両国駅に着いた。高砂部屋も焼けて、ない。立浪部屋は残っている。火はそこまでできているが駅も燃えていない。駅前の疎

開空地に作った防空壕に倒れこむように五人は入った。

「成一、まわりの様子を見てこよう。」という父の促しに二人して壕の外に出た。大豆を焼きつくしたような異様な臭気が鼻をつく。

都電通りに出て両国橋の上に立つ。国技館はまだ燃えてい  
る。ももんじやもない。東をみると、千葉の方までのつべら  
ぼうである。川の中を見ると、死体が浮いている。まるでい  
かだがバラバラになったようである。火のおさまり具合を見  
ながらわが家の焼け跡に行く。一つ目橋のたもとの壕の入り  
口で、三歳ぐらいの女の子の死体があった。まっ黄色であ  
る。完全な窒息死。思わず手を合わせる。心臓の裏から鋭利  
な刃物でえぐられたようなショックを受ける。母校の前を行  
く。校門にまっ黒焦げの死体が重なっている。まだくすぶつ  
ている鉄筋の校舎の中から十数人の影が見えた。どきつとし  
ながらも近づいて声をかけてみる。「いやあ、死体累々だよ。  
でもね、この奥の教室にカンヅメやたくあん、味噌の樽があ  
るよ。まだまだ持ち出せるよ。」という声が返ってきた。何  
のことかよく呑みこめなかったが校門をくぐって見た。まさ  
に死骸の山である。みんな逃げこんで蒸し焼きにされたので  
ある。プールにも十数体が浮いていた。運動場はアスファル  
トが燃えて歩けない。それなのに、焼け残った非常用の食料  
品を運び出す慾深い人間もいる。廊下に転がっている死体を  
平気で足蹴にしてカンヅメの箱をかついでいく防護団の連中  
に怒りがわく。

わが家の前に立った。何もない。あるのは焼け残った柱の  
いくつか。その上にかぶさっている壁土だけである。よくも  
こんなに灰になったものだ。業火のおそろしさと、その中を  
一時間近くも逃げ延びたわが家族の姿を想い、鳥肌が立っ  
た。周囲を見渡す。何もない。ふと隣りで、「やられちまっ  
た。」と父がもらした。父の眼は、二階の床の間に積んであ  
った蔵書が完全に焼け、それがまっ白い灰になったそのかた  
まりに注がれていた。

三月十日の空襲で若い私の「鬼畜米英撃滅」の敵愾心はい  
っそう高められ、十八歳の若さで陸軍特別幹部候補生を志願  
して豊橋に入隊した。しかし、その反面、人間のはかなさ、  
醜さ、愚かさなどというものをしみじみ味わされたのも事実  
である。戦争は、相手国だけでなく自国民の人間性をも奪う  
ものである。

◇西岡 衛 (65歳)

## 東京大空襲の青春

空襲・被災 ●

昭和二十年の春からB29による本土爆撃は頻繁に行われた。昭和十九年から私達の住居は芝西久保城山町一（現虎ノ門四丁目一〇一ノ二）に変わり本籍も移した。両親と一七歳の弟、共に学徒動員中の身であった。私は当時金澤八景にあった海軍航空技術廠支廠での約八ヶ月間の勤務生活が解除され三月九日の晩には帰宅した。喜びの夕餉<sup>ゆづけ</sup>をすませて床に就こうとしたのが、九時半すぎ、ニュースはB29が大編隊で東京方面にむかっていると報ぜられた。爆音が気になり、東京の上空からつぎつぎB29が編隊をなし悠々北上しつつある模様であった。外に出て見上げるとまさしくB29の大編隊が、サーチライトに映し出された。迎撃するわが方の機影、見当たらず、全く無防備の状況下だった。

「シユル、シユル、ザーツという音と共に焼夷弾<sup>しょういだん</sup>（六角形の鉄筒）が降ってきた。「ドーン」という鈍い音と共に暗い夜の静寂は破れた。火の手が上がった。住居の前の細道を隔て東側、そして裏の続きの二階建ての母屋が土蔵に接したあたりの部分から火柱が立ち上がった。西風であったので母屋か

らの類焼が警戒された。母屋住いのご夫妻は寝巻姿で火を避けるようにしながら避難した。私の住居の東南隅には約十メートル四方の大きな貯水槽が防火用水用に以前より造られてあった。また小さな防空壕の設置も義務づけられていた。火災発生間もなく、両親たちは、延焼は時間の問題と判断し、北方の通称田中山付近に避難するから、見届けてから避難するように念を押した。もちろん身の回り品はもって逃げた。

十二時を回ったころ、私と弟で、用水の水をバケツリレীদের散水作業を開始した。燃え続けている母屋は風下に位置するため、地続きになっている渡り廊下までの火勢はさほどではなく幸いした。ゆっくり廊下部分を切断し、倒壊、散水を繰り返した。兄弟二人で、とにかく、頑張った。水運びは最短距離の一部屋を土足のままで畳を犠牲にした。と同時に戸障子等はすっかりはずし、品物の中でとっさにこれだけは失いたくないと思ひ、かかえ込むようにしてシンガミシンだけは庭に持出し、横に倒してゴザ掛けし水をかけて置いた。当時は珍しく中古ではあるが、アメリカ製、我が家の虎

の子であった。この時までには周囲は完全に火の海。

防空頭巾は、火の照り返しを防ぐに不可欠なものとなった。ぬれた上衣と軍靴はすでにぬぎすててしまい、肌着、パンツ、はだしのままとなっていた。焼け落ちた一面は炭火と化しくすぶっていた。消えたかと思うとまた燃え上がる状況で、隣家の軒先もぱつと燃え付いた部分めがけて投水を繰り返しながら、夜明けをまった。夜明けは六時ごろと思われたが、何とか助かったなと、安堵と共に強度の疲労をおぼえ我にかえっていた。夜明けの愛宕山は、すっかり山容をあらわしていた。広町までの家はことごとく灰と化し、山肌も黒こげの幹だけを残し一帯白い煙が立ちこめていた。やがて両親から、隣組の人々が燃え尽きた我が家に帰って来た。呆然自失である。床下防空壕の中味もすべて灰と化していた。足の裏の痛みに気付き、血糊と泥で感覚を失いかけていた。鞆絵小学校に臨時医療施設があるときいて見てもらった所、ガラスの破片が多数突きささっており、破傷風にならなかつたのが幸いした。城山町一番地では、南側の二世帯、北原家と裏隣りが、ポヤ程度で残った。近隣被災者救護のための、炊飯、配給等で、我が家も当分の間ボランティア活動をした。

電話、電気の復旧に手間取り、一時この地を去り、渋谷富ヶ谷に臨時移転し、八月十五日の終戦を境に再び神谷町の地に戻った。やがて大学生活を続けながら、戦災復興、米軍進駐等々々ではあるが、焼け跡は整理され、立派な二階建の社員寮が出来た。池を回る庭園も同時に埋めもどされた。私共

の生活も昭和二十六年まで続きましたが、父親の定年退職を期に、いよいよ神谷町を立退いた。生死を共にした知合い縁者からすこしでも近い森元町（東麻布）に土地を取得し、住宅金融公庫融資住宅を建てて以来平成二年の、今日まで四十年の歳月が経過した。戦中戦後を通じ港区は古来山谷多く緑に恵まれていると同時に海外大公使館建物、住宅等一番集中している所で、電気、水道、ガス等についても他区に比し大変恵まれていた。大震災、大空襲を体験した八十四の母もお蔭様で健在である。幸い二人の息子も港区に住み世帯をもつた。

◆野路 六郎（60歳）

## 焼夷弾と大根の思い出

空襲・被災 ●

昭和十九年。旧高等小学校二年の時でした。家族は当時、母と兄弟六人で、病気だった兄も一緒に品川区大井町に住んでおりました。

私は学徒動員で軍需工場に行っており、渋谷の道玄坂近くにある警視庁の寮に入っていましたので、三月十日の空襲の日も深川にある工場に向かうため電車に乗っている途中でした。空襲はどんどん激しくなり家の方も大変心配でしたが、工場のある錦糸町の駅に着き、駅前の広場の方へ出ますと、なんと、見るも無残に一面は焼野原でデパートの建物だけがくすぶりながら残っておりまして。もちろん工場も焼けてしまっていたのです。

また、近くの川では火の熱さに耐えきれなかった大勢の人達が水を求めて飛び込んだのでしよう、水が見えなくなるほど死体でいっぱいでした。その中には馬や犬までもが飛び込んでおりました。手を入れてみるとお湯のように温かく、その惨状は残酷で語る事のできないほどでした。その中で一番印象に残っていますことは赤ちゃんをおぶったお母さんが仰

向けに浮かんでおり、中の方から赤ちゃんの握りこぶしだけが見えかくれし、お母さんの胸元からは貯金通帳がのぞいていたのです。また、その川では皮肉にも小さな魚が遺体を食べながら元氣よく泳いでいるではありませんか。なんとも残酷で悲惨な状況だったことを覚えております。それから駅前広場へ行って見ると遺体が山のように積まれて焼かれておりました。悪臭が鼻をつき、吐き気を感じ、今でもあの時のあの匂いは忘れることができません。

次に私の寮があった渋谷が空襲にあったのが五月二十四日、山の手一帯のB29の空襲でした。この夜は風のとても強い日でした。焼夷弾しょういだんの音は激しくなり、あちらこちらからは火の気が上がり無我夢中で大勢の人々が逃げ惑っておりまして。

私も近くの空地にある防空壕に向かうため防火用水の水をかぶりながら走っている途中で、幼い子供三人を連れた母親と一緒に防空壕の近くまで来ますと、またも焼夷弾の雨、急いで子供達を壕の中に投げ込み私もやっとの思いで中

に入ることができました。入口までもが火の海となり、もうこれで終わりではないかと思つたほどでした。しばらくたち、やっと外が静かになつたのでおそろおそろ出てみますと煙が真っ白で向こうも見えないほどでした。もうこれでおさまるかなと思つてみますと、またもや夜になってますます空襲は激しくなる一方で、ヒューヒューと焼夷弾の音は鳴り響いておりました。夜中になりやっと空襲はおさまり外へ出て見ますとぼんやりとした薄明りで焼夷弾があちこちにつき刺さっているのが見えました。「このままにしておくと爆発するぞ」と言われ暗闇の中で夢中になって抜き、無事に助かることができました。

朝になって防空壕の外へ出て見るとその光景はなんとびっくり。焼夷弾に交じり、いたるところに大根が抜いてあるではありませんか。防空壕は大根畑の隅にあつたのです。手が真っ赤になつており痛みがあつたのですが、手元が見えなかつたとはいへ、なんてことをやつてしまつたのだろうと一人、心の中で笑つてしまいました。

その後家の方も心配になり帰らなくてはと思ひ急ぎ足で歩いてた途中のことです。防空壕の前で中年の婦人が泣いておりどうしたのかと訪ねてみますと、「娘がこの中に生き埋めになっています。どうか助けて下さい」と言われて、私は必死になって素手で掘り続けて、やっと見付かつた時には残念なことに娘さんは椅子に腰掛け防空ずきんをかぶりカバンをしっかりと胸に抱いたまま亡くなっておりました。おかあ

さんが娘さんを抱いて放心状態で帰っていく姿が強く脳裏に焼き付いて忘れることはできません。家へ帰り着いてみますと、家族はみんな元気でおりりましたが、家は焼けてありませんでした。

この夜の死者は七千人を越えたとのことでした。今の渋谷は若者でいっぱいでもちろん当時の面影はありません。本当に平和な街です。

この体験はほんの一部でしかありません。長くつらいこのような悲劇はこの先二度と体験してはならないと心から祈り続けております。

私の終戦は八月十五日ではありません。戦後すぐ米軍の進駐軍に四年近く勤めることになり戦時中以上の苦しみやさまざまな体験をいたしました。

今年六十歳、本当に無事に生きていることが不思議に思えてなりません。

◆一ツ松多根（72歳）

## 霞町が半分残った

空襲・被災 ●

私の家は親の代から霞町に住んでおりました。父は表通りで、西洋酒食料品店と別に煙草屋の支店も経営していました。店員は五人おりましたが、戦争が進むにつれ一人ずつ兵隊に出征し、全員応召されてしまいました。家族は父母と私の外妹三人。食料品も序々に統制され、酒類、食塩、菓子、缶詰等、店から姿を消して行きました。

昭和十九年二月二十九日、私共にとって悲しい事がおきました。霞町ではじめての大火で、八軒が全焼しました。火元は八百屋さんで薪でご飯をたいていた残り火が原因でした。私の家は、一夜にして借家三軒も失いました。幸い角店でしたので、町会長様警防団の方々の応援で一階だけはとりとめましたが、それから間もなく、私の家が半焼で残っておりましたので、東京都から間引疎開の指令がまいり立ちのくことになりました。

支店の煙草屋の店がありましたので他に、一軒借家を借りて引越しました。その中父は十一月に他界しました。

私は煙草屋の商売の傍ら、挺身隊をのがれるため、前の町

工場に席をおき、恐しい機械の騒音ベルトの回る中、ミリーングボール盤の操作を習い飛行機の部品等をつくりました。煙草店は普段閉めておりましたが、専売局の配給日が指定されており、手不足のため配達も中止となり、一時青山の梅窓院まで取りにまいりました。配給の日、朝から店の前にお客様が行列し、バラの紙巻き煙草を一人分、約十匁を目方にはかり、紙に包みお売りしましたがたちまち売切れてしまいました。煙草の配給日は大変な作業でございました。

その中に次の妹はお産のため、母と一緒に父の生家の岐阜に疎開し、末の妹は学徒動員で、埼玉県南桜の陸軍造兵庁に行ってしまいました。三番目の妹は、麻布区役所に勤務しておりましたので、私と二人が東京に残りました。いよいよ空襲もはげしくなり、警戒警報になると女子職員は自宅に帰され、時折区役所の炊出しの大きな醤油のお握りを持って来てくれましたので、二人で分けあって食べました。

四月十八日より東京も大空襲となりました。わが町、霞町周辺も、五月二十二日夜半に、焼夷弾があちこちにばらまか

れ、前側の家に落下されました。私は隣組の群長として、鉄兜にもんべ姿でバケツおくり活躍しました。夜の暗闇の中、突然誰かが道の真中で倒れました。すぐに担架で救急病院の黒須病院にまいりましたが、ここでは駄目で、赤坂の前田病院につれて行かれたそうでございます。

後でわかりましたが、白石さんのおばあさんで、逃げる途中左の足に破片が入り手術をされました。夜が少しづつ白みかけてまいり、夜目にも道路に血が大量に流れ、はいていた草履が地面にこびりついておりました。火は一応消し止められたので、私は表通りが気にかかり材木町の停留場までかけて行きました。

阿部さんの塀から顔を出した瞬間、何と炎の風が川のように走って行きました。熱くて顔も出しておられません。炎の流れは六本木の方から霞町までやって来たのです。私は余りの恐しさにすぐ首をひっこめ、これでは駄目だと思ひ裏通りに戻って来ました。井戸水を力一杯汲出し、類焼を防ぐため、その附近の家々に水をかけはじめました。朝の六時頃まで夢中でした。やっと町の中が静かになり、再び表通りに出ました。何と私の家の疎開の跡地が空地であったため、炎の力も弱まり霞町の街が半分残ったのでございます。その時の感激は忘れられません。私は全身の力がぬけて、我家にもどりました。それから間もなく、前の家のご主人がこわれた物干しに、バケツ位の大きさの物があると云って、それを持出し道路においたと同時に爆発し、玄関のガラス戸がこわれ、

爆風で顔と頭にガラスの破片がさきり怪我をされ、前田病院から顔中包帯を巻かれ帰ってこられました。

一夜にして炎となり町が消えかかった恐しい夜の戦いでした。

直ちに町会長からのご依頼で町会の事務をお手伝いすることになりました。米、味噌、醤油等の配給のため、毎月一日現在の配給帳の人員の検印は大変でした。

八月十五日の昼頃、町会長より今から天皇陛下より重大なお話があるから、皆、庭に出ていらつしやいと申されました。私達は緊張して外に出ました。静かに流れる陛下の玉音に首を下げました。これで戦争が終ったのだ。安堵とともに信じられないままこの日を迎えました。霞町の町の方々もお蔭様で戦災で死亡された方はおられなかったと記憶しております。戦後四十五年を迎え、二度と戦争があつてはいけません。私達の体験を後世に語りつづけて参りたいと思ひます。

# ◆広田 いと（89歳） 戦災体験の思い出

空襲・被災 ●

目黒区清水町五六九番地にて空襲にあう。

昭和二十年五月二十四日、私の永久に忘れる事の出来ない悪日である。大東亜戦争もいよいよ私達の身近にせまってきた、敵の基地が沖縄まで占領されてからはいよいよ空襲が烈しくなり、東京もいたる所空襲を受けて無惨な焼野原となる。

私の家も案に違わず五月二十四日午後一〇時空襲に合い、丸焼けとなる。さて次男良知は攻玉社工業学校の二年生で船津工務店に勤めながら夜学へ行って居り、九時に帰宅して横になった所である。空襲警報発令と同時に照明弾が落とされ、大空一面真昼のようになる。電燈を消して早速防空壕の蓋をする。庭の築山に造った壕は空気穴が真中に出来て居るので、そこへ植木鉢をかぶせる。仏壇を持って来たが入れる暇も無く、位牌だけを風呂敷にくるんで入れる。そして縁側の下へ掘った壕はトタンの蓋をして土をかぶせて菊枝と二人そこで待避していた。前の白沢さんが「奥様、山田様の二階に爆弾が落ちましたよう」との叫び声にて外に出た所、五、

六軒先の山田様の二階は火柱と変わっていた。続いて来た編隊の敵機は親子爆弾をバラまき、一個の弾が数個に分かれる恐ろしい物で、私と菊枝の前に瓦屋根を貫いて二本防空壕の蓋の上に落ちたのですぐに砂をかけて消した。

一軒置いて隣組の星野さんへ五十キロの爆弾が防空壕の上に着ち、猛ちゃん、槇ちゃん二人即死する。大きな穴があき、「タンカ、タンカ」と叫べど爆弾が後から飛んで来るので危ない。私の家の座敷は十八本（後で数えた）落ちて明るくなる。私は水を用意のポンプでかけたが受け付けずあたり人影も無くなり、倉橋さんの家が焼け出し始めて最早これまでと思いい大通りへ出る。

菊枝が、お母様、と言って後よりついて来た。聞く所によれば角のガラス屋さんで消火を手伝ってくれと頼まれたそうであった。一人はバケツ、一人はシャベルを持ったまま夢中で西川酒店前の三角形の雑木林の空地へ入りこみ、ふと我が家の方を見上げれば次々と屋根に燃え移り真赤になっては崩れ落ちて行く様子は今だに私の脳裡を離れない。そして自分

達の立っている雑木林もあちらこちらと飛び火が来て、その度にもみ消していないと危ない。本当に生き地獄で暑くて暑くてしようがない。夜明けと共に警報解除となった。

娘と二人焼け落ちた我が家に戻る。庭の防空壕はお陰で全部無事であった。さてあの三十坪の瓦葺の我が家は一夜の内に灰となる。夫と共に映画一つ見ず、夢中で築き上げた財産も貸家として造った同町五七五番地の三軒の家と共に、自宅のまわり六軒合わせて計九軒も一夜のうちに灰としてしまった。がっかりして口もきけない、食事もしたくない。私は競馬場跡に逃げた二男良知に、滋賀大津市に出張中の夫と横須賀海軍軍人となっている長男へ電報を打たせた。

丸焼けの野原となつては残る物は防空壕の品物だけ、廊下の下に掘った所は石段七、八段の深さでたんす一さお入れ、下の段に瓶を埋め込み、ドライミルクの空缶に書類、債券、通帳等を入れて蓋をして置いたので全部無事であった。そして箆筒、本箱全部の上に洗面器や鍋、ボール、水の入る物には全部水を入れて並べて置いたので、入口の蓋を明けると同時に湯気が上つていて品物は全部無事であった。長男は電報を受けて早速お暇が出て二十五個の大きなお握りを携えてきてくれた。それも珍しい白米であつて、その味は今だに忘れることは出来ない。そしてまた、哀れな焼跡を見て本箱に一杯入れてあつたレコードが哀れにも中央の丸いペーパーだけ残してかすかに字が読み取れて赤青のちぢれたペーパーが残るのみ姿形もない。その床下に置いてあつたお餅をつく白

が良く焼けて大きな炭となり、量は大バケツ三杯もあつて大変役に立ち、昨夜漬けたばかりの糠味噌も樽のまわりは焼けて丸い形の糠の中でカブが一夜の内においしく漬かつていた。井戸はポンプで使えて、ガスが使えず石油缶の一方を口にして網を乗せ、炭を使って炊事は出来た。

一日置いて夫来る。焼跡のトタンを集めて早速二畳くらいの小屋が出来た。綱賀はその夕方横須賀へ帰隊した。その時も京浜地方の空襲に合い難儀をしたとの事であった。ああ空襲何とむごい目に合わせるのか。うちの家族は、今はただ無事であつて良かったと思つてばかりであつた。

焼跡の後始末は十日ほどかかり、夫はまた大津へ、良知は船津工務店へ勤める。私は六月七日に碑文谷警察へ行き配給米手続、転出届を出し、その日午後二時頃、主人の実家伊豆長岡花坂へ着きやつと一安心。伊豆の山々は早くもジージーと蟬の声や鳩の声を聞き迎えてくれた。関様も皆様良くして下さい、本当に地獄より来て仏に救われた思いだった。

東京ではモンペ姿で毎日過ごしていたのが、今日よりはネマキを着て寝られ可愛い子供と一緒に暮らせて本当にうれしい。お父様、お母様有難うと何度も心でさげんだ。

山へ行きせんまいわらび等、山菜をつんで食べ、米の配給は長岡温泉場へ行き帰りに元湯に入ってぬれ手拭を頭にかぶつて帰ればちょうど乾く。私達は関様の蜜柑庫の二階を借りていたのでやがて蜜柑庫を使用するようになれば二階に人が住んでいると品物が痛むとのことで隣の山の空寺へ交渉して

もらい、借りることが出来た。そこは八帖と六帖と茶の間、台所が付いていた。私達はみんなして一生懸命お掃除をすれば、山の上の見晴らしはとても良い。別荘のようだった。長女菊枝は洋服の仕立てや私も和服の裁縫、またみかん取りや田植えのころになれば早乙女となり皆一生懸命、本家のお手伝いをするので「お寺のおばさん」と皆さんにいわれるようになり、親しく暮らしていた。

大都会を焼き、沼津も焼かれ、花坂までも敵機は二機来てお寺の上を旋回して帰る。それを見ておばあ様は「もうこうなつては覚悟をきめて死ぬ時は一緒に死のう」と私の手を固く握りしめた。やがて八月六日に広島へ原子爆弾が落ち続いて長崎にも落ち、敵は我が国を全滅させる様子を見せて来た。八月十五日ラジオにて正午に重大ニュースを発表しますから皆さんラジオの前に集って下さい、との知らせにて関係の家族一同と共にラジオの前で天皇陛下の御言葉をお聞き申上げ、私たちはただただあふれる涙を押さえかねていた。花坂の皆様、関様一同「もうこれで戦争はすんだ。もう空襲はこないから電気も明るく出来て安心だ」と喜び合った。

あの日の丸の小旗を打ち振りながら出征軍人を送り出した私達。また、一生懸命に箸の立たない程やわらかなお雑炊を食べながら軍需工場で働いた。学徒動員の娘さんたちが、「ほしがりません勝つまでは」と心でさけびながらつとめた事もみんな水の泡と消えて、誠に口惜しい結果となってしまった。





三宅坂付近

(港区立南山小学校元教諭 恩田孝徳画)



三宅坂から桜田門

(港区立南山小学校元教諭 恩田孝徳画)

◇廣畑 美恵（68歳）

## あの夜、あの「コマ」

空襲・被災 ●

芝浦の岸壁の方向から、大きく翅を上げた鷺が一機、翼まっ黒な姿で、頭上に迫ってくる。あ、また一機（その時は飛行機がB29ということはわかっていない）。二三分おきに現れてくる。私は、愛宕警察署（御成門近く）の並び、赤レンガ通りの延長線にある自分の家の前に立って、空襲警報と共に、目の前にくりひろげられた爆撃の事実にみいられていた。新橋に近いレンガ通りに（新正堂附近）ローソクを次々と並べたように焼夷弾がおとされている。火災が至る所で発生していく。

私の家の頭上は、飛行機の通り道からちょっとはずれ、目の前にみえる爆撃を百メートル位離れているのではないかと目測をしていた。

家の前に三人ほど人がよってきた。「大変な事になりましたね」「私は、芝山内から逃げてきたのです。とにかく着のみ着のままここまでできて、やっとほっとしました。」「ここは安心ですね。」「お隣の二階に男の方がいらっしやるのですが、ぐっすりねていらっしやるのか、声をかけても出てきま

せん。こわいので私共だけで、火事のみえない所をと走ってきました。」

三月九日深夜のB29による東京大空襲のあの夜のこと。四十五年たった今でも、「あの夜のあの「コマ」は忘れることができない。南桜校に勤めていて、三月一日に六年生の卒業と進学のために、鬼怒川の疎開地より帰京してきたのである。今日帰京した子供達もいた事であろうと心が痛む。目の前の桜川校は、黒々とした校舎がくっきりと見える。南桜校の空の方はくらい。しかし、私の母校桜田校の周辺は、火災の火の手がすごい。友人の家、桜田校も火に包まれているようにこちらからは見える。

ひとしきり、芝浦方面からのB29の襲来がとだえたのをみて、夢中で、学校へいかなくは、先生方も泊っていらっしやることだし、自分の目で確かめてくるという、真夜中、家を飛び出したのである。桜川校から桜田校へ向う、火が、盛んに燃えている、Mさんの家は焼けてしまった。桜田校は焼けていなかったが、学校へいく途中、焼けだされて人々は

避難したのか姿がみえない。南桜校まで烏森通りをとおって電車通りをわたり、ところが、南桜のまわりは焼けていない。新橋駅付近は強制建物疎開で空地が多かったためか飛行はしなかったのではないかと等考えながら歩く。人々が動きまわって防火活動に当り、最小限の被害にと努力していたことと思うが、よく覚えていない。学校は無事、ほっとして職員室に入り、先生方と空襲の恐しさを話しあい、まのあたりの事実を確かめあった。私は家が無事であるため、そのまま朝まで、学校にいた。子供達の家は大丈夫であることを知り、ありがたいと感謝。疎開地から半年ぶりに親子一諸の生活をして十日もたたないうちにこの戦災を経験する。東京の大空襲ということなので、六年生の中には、帰った晩、明日帰る組は、家がない、親がいないなどという悲しい子供達もいるかもしれない。この時は、自分の現在おかれている立場から、学校を中心とした担任の子供達の無事のみを願う気持ちでいっぱいであった。焼夷弾のあの浴びせるような砲火から逃れ、火の海から逃れて無事で顔を見あいたい。そんな気持ちが全身を貫いたのをいまだに心の奥底にしまいこんであるような気持ちがある。

十日の昼頃、職員の一人が、それこそ、乾ききったうつろなまなざしで、くたびれきった様子でころがりこんできた。目の前で娘を、救うことができなかつたといつて泣きじゃくっていた。口に水、食物を入れすこし落ちついてから、浅草より歩き続けてきた道中の様子を、きれぎれに私共に訴える

ように話をしてくれた。戦後いくつかの冊子に発表されているが、その時の職員の話は、爆撃下の人々は、いやおうなしに災火に押しつぶされて、逃げまわること、肉親とも別れ別れになることも避けようもない現実の姿である。

昭和二十年八月十五日を境に、戦争という一人の力では抵抗の出来ない姿から、「さようなら」をした私達である。関東大震災直後より、芝区南佐久間町をふり出しに、桜田校の隣、神明校の近く、桜川校の傍と、父の運送業のため、転居をしたが、いずれも小学校のすぐ近くであった。後に教師となった私も終始港区内で奉職し、戦時下の教育の学童疎開、終戦処理のための学校教育、六・三・三制の現在の教育に至る長い年月をこの身心で、うけとめ、その中に埋没できた人生を感謝している現況である。この度の「戦争体験」という働きかけに、戦争というのは、戦地も戦場で戦っている人達も、国に残されている人々も常にいつ戦場となるかは、誰も皆覚悟していた事実を、今思うことができる。

◇文屋元次郎（60歳）

## サイレンと高松宮邸

空襲・被災 ●

絶対に再び、このような恐しく悲惨な事が起こってはならないと念じつつ私の空襲体験の話をしてみようと思う。

昭和二十年五月の末、寝間着に着替えて睡眠する事が許されず、普段着のまま、仮眠をとっていた真夜中、日常茶飯事のようになってしまった例の警戒警報の重く、しかしけたたましいサイレンの音に目を醒ました。すでにこれまでも何回も帝都（当時は東京をそう呼んでいた）が空襲に遭いながらも私の家の付近は焼夷弾（しょういだん）が落ちたことが一度もなかったから、この日も空襲に対する馴れと多少のしぶとさも手伝って、もう一分、もう一分寝ていようと蒲団をかぶってごろ寝をきめこんだ時、横に寝ていた父に起された。ラジオのスイッチをひねると、『東部軍管区情報、敵のB 29数編隊が伊豆半島東部より本土に侵入、富士山上空より帝都に向かいつつあり、警戒を要す』旨の放送が流れた。高松宮邸の近所に住んでいた私は、仮にこの辺りが空爆されたとしても、高松宮邸に護衛にいられた海軍陸戦隊の人々が、上手に消してくださるものと子供心に信じ切っていたものだった。

ラジオの放送があつてから三十分もたった頃、十回続けて鳴るサイレンの音にいつもの事ながら、緊張し、防空頭巾をかぶり、火たたき（竹に三十センチくらいの長さに切られた先端をこま結びに丸めた十数本の荒縄がくくりつけられ、水に浸して火を消す当時の各家の火消し道具）を持って立っていた。そして空をみて驚いた。方々から照らし出される探照灯（サーチライト）の重なり合ったその対角線の中に、夜目にも鮮やかに四発のB 29が五、六十機もあつたろうか真白に照らし出されていた。陸上からは、申し訳程度に高射砲から対空砲火が散発的に発射されるのだが、余りにも超高空を飛行しているため、届かぬまま炸裂してしまう状態だった。また、本土決戦に確保しているため迎撃に出る荒鷲（味方の飛行機をそうよんでいた）も皆無といつてよい程であった。そんな無防備に近い我が方の防空網を嘲笑うかのように一糸乱れず、整然と幾何学模様を描き出しつつ悠々と飛行している様をみて地団駄を踏んで悔しがっているしかなかった。

すると、突然にまわりの空が昼のように明るくなった。空

を見上げていた私の目の中に映し出されたものは、無数の巨大な白い明るい物体、まるで絵で見たことのある彗星に似たものであった。それが突然に数限りない小物体に分かれて落下してきた。親子焼夷弾というものだった。すると間髪を入れず地面一体がしかも噴水が湧き出てきたように文字どおり、真白い火の海となった。緊張していたためか、さして熱いとは感じなかった。私は夢中で、防火用水（直径八十センチ位、高さ一メートル五十センチくらいのコンクリート製のもので原則として各家庭の家の前に置かれていた）の中からバケツで水を汲み、頭からその水をかけ、私の家の裏に住んでおられた鈴木洋子さんと組んでバケツに水を入れては焼夷弾から噴き出る火を消し、細かく散った火は、火たたきに水を一杯に含ませてその字のようにたいて消した。私の家には、軒下と家の中に一発ずつ落下したが、消すことが案外難なく出来た。隣りの床屋さんには、屋根を突き破り、二階で燃え出したため、隣組（戦時中の隣近所のコミュニティ団体）の人達が、梯子を立てて、バケツリレーで消火に成功した。この日、空襲に使用されたものは、エレクトロン焼夷弾というものでその明るさで圧倒されたが、下町大空襲の際に使われた油脂焼夷弾ほどの威力はないということ聞かされた記憶がある。

この空襲の時の事で一番印象に残っている事を書き足しておこうと思う。私の住んでいたこの辺りは戦時中は『西伊皿子高輪台町会』といい、高松宮邸のある高輪西台町もその一

部だった。その当日、疎開もされずにおられた高松宮殿下、妃殿下が防空頭巾を被られて、私の家と前の中野さんとの間に張られた非常線の所で二、三人の陸戦隊の人々と共に、ご自分の町会の方々が甲斐々々しく、防火活動に活躍している姿をみておられ、燃えていく家々を心配そうに眺め、辺りの火がすっかり鎮火するまで立ちつくしておられた姿が、目の奥にはつきりとやきついている。

これを読まれて、空襲を体験された方々が、いまわしい戦争中の想い出ながらも一種の郷愁にも似た懐かしい想いを甦らせて頂ければ幸せに思う。再びこのような事を決してこれからの世代の人々に味わせてはならず、決してこのような事をおこしてはならず、かつ決しておこさせまいと念じつつ、また信じて筆を擱く。

## ◇御子柴孝一（75歳） 命を救ってくれたハシゴ

空襲・被災 ●

「お宅は大使館の隣だから空襲の心配はないね。」と罹災した友人から羨ましがられた。言われてみれば、昭和二十年に入って東京は度々の空襲で相当な被害が出ていたが、赤坂地区には大した被害もなく、夜毎、各所に上がる赤い空を眺めながら今夜も助かったと安堵したものであった。

五月二十四日、この夜は強い風が吹いていた。こんな夜に空襲でもあったら、三月十日の二の舞になるのではと不安で落ち着けなかった。すでにラジオは、B29の数編隊が南方洋上にあり関東地方を襲う公算大なり、続いて東京地区に向かう、と警報が出されていた。それにもかかわらず前夜（二十三日）山の手が焼かれ、二晩続けての米襲もあるまいとたかをくくっていた。

長く尾を引くサイレンの音が鳴り止まぬ間に、敵機の爆音が頭上を通過した。低空を飛ぶ銀色の機体が驚くほど大きく見え、弾倉が開いて、バラバラと投下する焼夷弾が斜めに頭上を落下し、民家の屋根に吸い込まれてゆく。赤坂田町方面に発生した火災は黒煙とともに燃え盛っている。後続の敵機

が轟音を残して次々と通過する。麻布谷町あたりが燃えている。私たちの町一帯へ煙が流れ込み、火の粉が舞い上がる。

一瞬、空を裂く落下音とともに周辺は焼夷弾で包まれた。我が家の屋根を貫いた一弾は玄関で破裂し、同時に白い油脂が四方に飛び散り、直ちに発火し燃え広がった。この町内には、消火に従事する男手も女手もほとんどなかったため、消火に立ち向かう術もなく焼けるにまかせただけである。

煙と火に追われ、火勢の弱い場所を選びながら大使館の石塀まで来ていた。塀は高く、飛び付ける高さではない。夢中で塀にそって逃げてゆく前方にハシゴが立てかけてあるのではないか。この場所に誰がかけたのかと不思議に思ったがそんな事を詮索する余裕はない。神の助けとばかり館内に飛び込んだ。このハシゴが私の命を救ったのである。広い館内は別世界で、吸う空気の何と美味しかったことか。まさに蘇生の思いであった。

館内に何人の避難者がいたのか記憶にないが、明け染める空に鳴りわたるサイレンの音が、なぜか白々しかった。



浅草にて

(港区立南山小学校元教諭 恩田孝徳画)

◇宮崎 一一一(52歳)

## 芝公園を母と妹と夢中で逃げた、五月の大空襲

空襲・被災 ●

私が小学一年生の時、現在の東麻布、昔の森元町で、戦時中を過ごし、終戦を迎えました。

小学一年生ですから、正確な記憶として書けるか不安ですが、この機会に思い出せる限り、書き残しておきたいと思います。

戦争が最も激しい時に、集団疎開にいかずに、両親と一緒に終戦を迎えたことですが、戦争で日本への米軍の空襲があり、本土決戦を予想して、小学生は疎開されたのです。姉は三歳年上で、当然集団疎開にいかされました。当時は、すでに戦争末期でしたから、食糧はすべて配給で、食べものがすくなく、いつもお腹をすかしているような時でしたから、姉たちも同じ、両親のもとにいる私以上に食糧事情が悪かったのでしょうか。両親が面会をゆるされた時には、母の話では「姉は、すでに栄養失調で、目を開けたまま寝ていた。このままでは、いずれ死んでしまう」と考えたそうです。同じ死ぬのなら、私を疎開させずに、手元に置いて、一緒に死のうと、当時の戦争の激化の中で考え、私を疎開させずに、両親の手元で育られましたので、終戦後、集団疎開からもどつて

来たのが昭和二十年の十月ですから、私はその間勉強ができませんという点では、戦争犠牲者なのかもしれません。

昔の森元町は、長屋が密集して人口も多く、映画館も近くにあり、森元商店街は大変にぎやかでした。子供たちは今のような自動車もありませんでしたし、町の中には路地がいっぱいあり、子供たちの遊び場でした。そこでメンコや、ペーゴマ、石けりなど、おもいきり遊びました。

町の様子は、父と「わぐら」という塩湯の銭湯につれてゆかれました。当時は町中のほとんどの人々が銭湯を利用していました。最大のコミュニケーションの場でもありました。子供たちは、おじいちゃんたちに、よくからかわれたり、注意も受けました。下町のぬくもりのある人情が思い出されます。しかし、東麻布の銭湯も六軒が一軒をのこして全部焼けてしまいました。その後の焼け跡で、家族はドラムキャンプで入浴をしました。

戦争は激しくなり、空襲警報が昼夜をとわずなり響くようになりました。昔の私の家の長屋は、現在の東麻布一ノ七番の所と思います。その長屋は、通路の両側に二階建て、入

口の玄関の左側には台所があり、一階は二間、二階も二間、現代ふうにいとうと三DKです。長屋の通路の中ほどに、共同の水道、そして防空壕と大きな用水桶がありました。昼、空襲警報がなり、米のB29だと思えますが、飛んできました。芝公園の丸山に高射砲がおかれていましたが、高射砲の弾がB29にとどかず、逆に日本軍の飛行機が打ちおとされるのを防空壕から恐さ知らずに見ていました。

戦争の末期になって、軍の命令で類焼をさけるため、軍が一方的に線を引いて、その中の家の取り壊しがおこなわれました。家にロープをかけ、多勢の人が引っ張って取り壊してゆくのです。友達も家を壊され引っ越してゆき、さみしい思いが子供心にいまだに残っています。いまの港区で大企業や地上げ屋が土地を買いしめ、住民を追い出してゆく、軍と同じようなことを、大企業が立ち退かしている現実を見ると、時代が逆もどりしているのではと考えさせられます。

食糧事情も大変悪くなりました。配給の「ぞうすい」を買った子供でも順番取りにならばされました。その「ぞうすい」もお汁が多くて、箸が立ちません。当時は貴重な食べものでした。しかし空腹をみたすことは出来ませんでした。ますます食糧事情は悪くなる一方です。

東京、最後の大空襲五月二十五日を迎えました。いつごろかわかりませんが空襲警報がなって、まもなく南の方角が真赤になり、あぶないと、夢中で芝公園に母と一歳の妹と私は逃げ出しました。ところが現在の38、39森ビルの水交社の前まで来たら、焼夷弾がバラバラと数メートルごとに落ちて、

パツと火をふき一面、火の海になりました。母は腰をぬかして歩けなくなり、しゃがみこんでしまいました。恐いことを知らなかったのでしょう、私は母をひきずって芝公園の中を逃げまわりました。私は夢中で逃げてよく覚えていませんが、弁天池から梅村への小川の橋の所に大きなイチョウの木がありました。その橋を渡ると、大きな防空壕の穴がありましたが、そこに逃げこもうとしたら、大きなへび、青大将だと思えますがとぐろをまいて鎌首をもたげているではありませんか、中に入れません。そしてまた逃げまわり、後から同じ所に来たら直撃弾で穴は、すっぽりうまっていました。そしてどう逃げたか覚えていませんが、いまの正則学園だと思いますが、大きな防空壕があつて、軍人がいて、そこに避難をするようにいわれました。大勢の人がいました。朝方、父が来てくれ、家に帰る時は、一面焼野原になっていてあちこちで死体を焼いていました。だれもが動作がにぶく、下を向いている光景は、いまだに鮮明に覚えています。戦争の悲惨さの一面です。子供心に戦争はいやだと思いました。

私の家族は、飯倉小学校の焼跡にバラックを建て住みましたが、終戦後も食糧難は続いていました。だいたすかすや、ふすまなどの配給、なき父母には、よく育ててくれたとの感謝でいっぱいです。

私の経験からも、政府の行為によって再び戦争の惨禍がおきないよう、国民の皆さんと決意をあらたにしたいと思えます。

◇山本 政東（83歳）

## 若い命を失った娘さん

空襲・被災 ●

今は本当にすばらしい国になった。食物はすきな物を、いつでも、どこでも買うことができる。こんなことをあの時は夢にも考えたことはなかった。この時は切符制であって、切符で買えるものはわずかの品であった。戦争というものは国の総力戦であり、一億火の玉となつての掛け声で、ぜいたくは敵だ、勝つまではほしがりませんと、ただただ国の方針に学徒は軍事訓練、そして出陣、女子は挺身隊（ていしんたい）となつて軍需製品工場に働くという事であった。小学生は父母に別れて集団疎開に地方各県に行つてしまった。我が家は母方の長野県柏原村に二十年一月四日大雪の中を疎開した。これで我が身も軽くなつて徴用で働く毎日であった。忘れもしない昭和二十三年三月十日、赤坂から望見すると東の空は赤く染め一晩中、炎となつた。この時下町は全部というほどに焼失した。

天にはB 29が何回ともなくじゅうたん爆撃をくりかえしてきた。これで木と紙の住宅は火が吹き、次に消火のいとまがでなかつた。この時我が家はおばさんと二人でいたが、おばさんは朝になつて下町にいる息子夫婦がどうしているか見

に行くとかけた。おばさんにおにぎりを持たせてやつた。自分も一日休んで隅田川まで歩いて行つた。途中お得意様を見にゆくこともあつた。まあよく焼け尽くした。

地震と違つて全部平になつて、まだぶつぶつと燃え残していやなおいをただよわせていた。川の中には人が重なりあつて浮いていた。それを引き上げる奉仕の方と思う、お腹が太鼓のようになつて、子供をおんぶしていた時があつたらしく、肩にひもがだらしなくついていた。悲惨という言葉はでてこないほどだ。まともに見ることはできない。この大きな川の岸一帯がこのようで、馬も浮いていた。日が落ちてきたので、急いで帰宅した。幸い家は無事であつた。この月を境に今度は全国主要都市の爆撃が始まつた。本土決戦という掛け声にふるい立つた。この時は日本人であるものは、そうならざるを得ないだろう。そして五月二十二日ついに我が町にあちらさんの爆撃機がやつてきた。東京を全部焼き尽くすということだろう。幸いに我が家は残つた。

しかし荷物を今の赤坂九丁目の桑田記念館にある蔵に預け

てあった。荷物は我にとって良い家財であった。これで我も心の荷が軽くなった。なにもない方が安心感があった。へたに道具があるとかえって心配の種になる時でもあった。この庭に大きな防空ごうがあつて町の人は空襲があるとここに待避したものだ。

二十四日夜、激しくB29がやってきた。焼夷弾しょういだんのからがらという音もすさまじく、あちこちと耳が破れるほどであった。自分も少しあたりを見まわって歩いた。遠く近くに火の手が上がってきた。音がしたときはちよつと家の軒先に身をかくすので、人間の本能はかくすことで安心するのだと思つた。空襲は益々激しくなつた。その家に落ちたら一ぺんに火だるまになってしまうのを忘れているのかもしれない。この時防空壕の内からちよつと身を出した私の知人の娘さん、十八歳であつた。弾はその背をかすめた。弾は不発であつたが、大変な傷であつた。いたいいたいと泣きさげんだがどうしようもない。アカチンを塗るくらいの薬しかない。夜が明けてから救護所にタンカで運んだ。ここでも薬というものはこの位で、失血多量と驚きとで親がただどうすることもできず、若い命を戦争で亡くした。赤坂地区でも壕で、また大きな家に逃げこんで、命をおとした方もあちこちにゴロゴロと見た。焼死者は炭のようになっていた。自分はそのあとも毎日工場に。今となつては無駄な仕事に、しかも工場は爆弾で焼失してしまつた。日本特殊鋼で蒲田にあつた。



浅草吾妻橋にて

(港区立南山小学校元教諭 恩田孝徳画)

◇若山 正夫（73歳）

## 空襲の中、炎上する増上寺仁王門

空襲・被災 ●

それは昭和二十年三月十日の夜半の事でした。当時、私は警備召集にて国電田町駅芝浦口の近くにあった芝浦工業学校を兵舎とした警備隊芝浦分隊に召集され駐屯しておりました。そのころ召集には、三種類あり、俗に赤紙といわれた、軍隊に召集されるものと、桃色の召集令状で必要の時だけ警備隊に召集される警備召集（普通は自宅、職場にいます）、白色令状の徴用とです。この警備隊は予備役の軍人が対象者でほとんどの人が戦地での戦争体験者なので動作、行動など共通したものを持っていましたので結構楽しんでやっていました。

さて、その日は本格的な大空襲となり、飛んできたB29、四発の爆撃機が編隊にて低空より次から次へと襲いかかってきて、その数も数えられないくらいでした。そこへ日本の帝都防衛軍の照らすサーチライトの光が交差して敵機が夜空に浮かび上がって見られました。

当日私達は昼間、豊岡町あたりの民家を強制疎開といって取壊し作業に行っていました。夕食後はまだのんびりとしていました、九時消灯といっても灯火管制中でもあり、暗い室

内でしたがごろごろしていたようです。

何時頃就寝したのかよく覚えていませんが、夜中に出勤命令が出て跳び起きました。その頃既に空襲が始まっていたようです。暗い街の中をどう走ったのか覚えがありませんが着いた所は増上寺で、直ちに私達は運慶作の仁王像のある向かって左側の仁王門の警備に当たることとなりました。この頃増上寺から、徳川二代將軍秀忠、夫人を埋葬したお靈屋（おたまま）も火災が発生しておりました。寺の関係者や一部の警備隊員などが懸命の消火活動をしていましたが、火は一層燃え広がり、消火用のポンプの水もあまり勢いよく出ず、とてもバケツの水や火たたき程度では手におえず、もうその頃には燃えるにまかせるといって仕方がない有様となっていました。仁王門とお靈屋との間に何故か、酒かしょう油の仕込み用の大きな樽が二、三個逆さにして置いてありました。私は他の隊員三、四人と一緒に梯子で仁王門の上に取りました。そこからお靈屋の方を見たとき、あつとばかり本当に声も出ないくらい感動でした。目の前には紅蓮（ぐれん）の炎に包まれたお靈屋が

展望台から景色でも見る感じでみられました。建物の柱など何層にも漆で塗り固められた内部が燃える時は七色の炎と言いますか、どんな絵具でも出せない美しい色で、とても言葉や文章では表現出来ません。また、石段の所に銀色に光った水のようなものがだらだらとゆっくり流れ出てきて（後で聞いた話では棺桶に詰められていた朱肉が長い年月を経て水銀化したものとのことです）、その面に七色の炎が反射して輝きます、そのうち梁<sup>はり</sup>などがそこへ焼け落ちてくると色の着いた光があたりに飛び散り、どんなすごい花火でも勝てないこの色、迫力には、もう何も言えない美しさでした。仁王門の上にあった隊員、誰も一言の言葉もなく、ただ呆然としているのみ、はっと気が付くと何だか足の裏が熱い感じですよ（地下足袋をはいていました）。すると下にいた隊員が大きな声で「危ない、火がついたぞ」。見れば門の屋根（銅葺の下は茅が十センチ位の厚さに葺いてありました）の銅葺の先端からぷすぷすと煙が出てきています。そのあたりを足で踏みつけてみました。が何の効果もありません。下からは「駄目だ、早く降りろ」と怒鳴っているのです、上にいた全員夢中で飛び降りました。ほとんど同時に屋根全体が炎に包まれてしまいました。私達は火のついた門をくぐって表に走りませんでした。道路の反対側に渡り仁王門を振り返って見ると、右と左、火を背にして呵うんの姿の仁王は、これまた何とも形容の言葉も出ない造形美術の極でした。全員唯黙って見ているのみの時間、気が付いたときはそろそろ夜も明ける頃となっていま

した。お霊屋も仁王門もそのころには焼け落ちてしまいました。が燃えつづけています。何をすることもなく私達は宿舎に引き上げました。

私はただ今七十三歳になりました。少々不謹慎とお叱りを受けるかもしれませんが、私の一生の間にこんな美しいもの、景観はもう見ることは出来ないでしょう。今でも頭の中にはつきり映っていて忘れる事が出来ません。戦争の思い出として苦しかったこと、嫌だったこと、悲しいことなどありました。ただこれは忘れられない思い出となっています。

唯今にして考えてみれば私としては美しい思い出ではありませんが、しかしながら戦争ということは戦争当事者お互いに分はあらずです。一方的にどちらかが悪いときめつけることは出来ないと思われませんが、もっと大人の話し合いが出来て戦争を回避し、このような日本だけでなく世界的な美術品をむざむざ灰尽に帰すような愚かな事は二度としてはならな

いとつくづく感じています。

歴史の中で世界中各地で過去何度も戦争は、なされてきました。そしてその結果失われた数々の美術品、工芸品や建造物などお金では換算できないし、またもう見ることが出来なくなっています。宇宙から見れば、こんな小さな地球の中、自然と環境と共に残されている貴重な美術工芸品などは何とか残したいものです。（日付が三月十日と記憶していますが、少し自信がありません。間違っていましたら何方か何月何日とご教示頂ければ幸甚に思っております。）

